



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	日本人学校の児童・生徒の家庭生活観と家庭科観：ロンドンおよびパリ日本人学校の事例をもとに( fulltext )
Author(s)	池崎, 喜美恵
Citation	東京学芸大学紀要. 総合教育科学系, 58: 361-369
Issue Date	2007-02-00
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/65485">http://hdl.handle.net/2309/65485</a>
Publisher	東京学芸大学紀要出版委員会
Rights	

# 日本人学校の児童・生徒の家庭生活観と家庭科観

—— ロンドンおよびパリ日本人学校の事例をもとに ——

池 崎 喜美恵\*

家庭科教育学

(2006年9月29日受理)

キーワード：家庭科，日本人学校，ヨーロッパ，児童・生徒，家庭生活

## 緒言

外務省「管内在留邦人子女数調査」<sup>1)</sup>によると、海外に在留している学齢期の日本の子どもたちは、一時期減少していたが、平成13年以降増加の途をたどり、平成16年では54,148人にのぼっている。また、地域別<sup>2)</sup>にみると、北米には20,659人、アジアには16,981人、ヨーロッパには11,549人の順に多くの子どもたちが在留している。

海外に在留している子どもたちが通学する教育機関としては、日本人学校、現地校、補習授業校、インターナショナルスクールなどがある。アジアでは日本人学校に通学している児童・生徒が12,228人と最も多く、次いでヨーロッパでは3,079人が日本人学校に通学している。

全世界に点在している約90校の日本人学校のうちヨーロッパには23校の日本人学校が設置され、前述の如く、ヨーロッパでは日本人学校に通学している子どもたちがアジアに次いで多い。

このように日本人学校は重要な在外教育機関であることから、これまでに、アジアや北米の日本人学校の家庭科について研究を進め、知見を得ることができた。

## 研究目的

本研究ではロンドン日本人学校とパリ日本人学校の実地踏査や児童・生徒の家庭生活や家庭科学習に関する意識調査を行った。そして、ヨーロッパにおける日本人学校の家庭科教育の現状を明らかにし、日本人学校の家庭科指導の改善に資することを目的とした。

## 研究方法

日本人学校の家庭科教育の現状を明らかにするために学校参観と質問紙調査の二方法により研究に取り組んだ。学校参観に関しては、平成16年10月～11月に日本人学校の教育施設や家庭科の授業を参観し、指導の現状を考察した。また、調査対象者は、家庭科を学習している小学部第5・6学年78名、中学部1・2・3学年91名、合計169名である。調査分析としては、標本数が十分とは言えない点もあるが、今後の研究で調査対象者を増やしていこうと考えている。

質問紙調査の内容は、児童・生徒の海外生活の態様、家庭科学習の実態および家庭科観についてである。

また、学校長や家庭科教諭へヒアリングを行い、児童・生徒の家庭生活の様子や家庭科指導に対する意見等を聴取した。

## 結果および考察

### 1 ロンドン日本人学校の概要

#### 1.1 学校の概要

ロンドン日本人学校<sup>3)</sup>は、昭和40年に「日本語会」として発足し、児童・生徒数20名、教員4名で開始された。その後、児童・生徒数の増加により補習授業校になり、昭和51年、英国政府より学校法人としての設置を認可され、英国の私立学校のステイタスを獲得した。現在は、ウエストロンドンのイーリング区アクトン

\* 東京学芸大学 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

の落ち着いた住宅地・文教地区に学校が設置されている。写真1に示すように、校舎は、女学校として建てられた100年以上の歴史を持つ総煉瓦造りで、重厚な雰囲気醸し出している。周辺環境と調和をとりながら、日本の教育に適合するように増改築を行っており、教育環境として恵まれている。

児童・生徒数は平成16年度では、小学部344名、中学部125名、小・中学部あわせて469名、教員数約40名ほどの比較的大規模な学校である。この国では、子どもたち同士で自由に遊ぶことには制限があり、子どもが1人で外出できないなど様々なきまりがある。また、慣習として子どものしつけは親が担うべきであるという親に対する期待感が大きく、また保護者も教育熱心である。緑を大切にするのが重視され、ナショナル・トラスト運動など、環境に対する配慮は国を挙げて意識が高い。

日本人学校のカリキュラムの特色は、現地理解教育にあるといわれている。小学校から外国語が位置づけられたり、現地素材を教科・領域で取り上げたり、交流活動が行われたりしている<sup>4)</sup>。このことは、ロンドン日本人学校でも積極的に行われ、英会話や英語活動はもとより、『English Activity & Speech』を行ったり、『ロンドンタイム』と呼ばれる英国の自然や歴史、人々の生き方などを対象として、「生き方」の学習を深めている。

## 1.2 家庭科の授業

家庭科は小学部5～6学年に週1.5時間、中学部1～2学年に週2時間、3学年に週1時間配当されている。

技術・家庭科の目標として、学校要覧<sup>5)</sup>には次の3点があげられている。

- (1) 英国の特色を生かした技術・家庭科教育の実践に努める。
- (2) 情報活用能力の育成に努める。
- (3) よりよい家庭生活を送ろうとする態度の育成に努

める。

具体策として

- (1) 生活環境や生活経験を生かした指導計画をたて、実践する。英国の素材を活かしたものづくりの学習を行う。
- (2) コンピュータやネットワークを有効に活用する基本的な技術の習得を目指す。
- (3) 児童・生徒が自分の生活に結び付けて学習できる課題解決学習を充実する。

たとえば、英国の素材を生かしたものづくりの学習に取り組んでいるが、前述の現地理解教育として取り上げていることがうかがえる。児童・生徒が学習したこのような内容は、日本へ帰国した際に、家庭科の授業の中で自己の経験を発揮できる機会にもつながると思われるので、指導の深化を図りたいと考える。

写真2に示すように、家庭科室は調理室と被服室が1スペースに有り、ここで20数名の児童・生徒が学習していた。ロンドン日本人学校の家庭科室の施設や設備は整備・充足されており、教室内の装飾も児童・生徒たちが製作した作品を展示するなど学習環境がよく整えられていた。

教員に児童・生徒の家庭科学習についてヒヤリングしたところ、次のようなコメントが得られた。

- ・転入生や転出生が多いので、1学期間で指導したことを再度指導しなければならない。
- ・イギリスでの生活を活用した学習内容としてイギリスの住宅を調べ、住まいについて学習することを工夫した。
- ・日本のことを現地の人に紹介しようということで、現地校の児童と交流をした。その時、現地校生とみそ汁を作ったり、ご飯を炊いておにぎりを作ってもてなした。しかし、例えば、イギリス人はりんごを皮ごと食べる習慣があるので、皮をむいてりんご



写真1 ロンドン日本人学校の校舎



写真2 家庭科室

を食べるのを躊躇したり、素手でおむすびをにぎったら現地の子は食べなかったりするなど、食文化の違いを子どもたちが気づいた。

- ・ゴミの処理の問題も話していきたいが、校外に出て学習するのは危険が伴い、子どもが一人で買物に外出することにも制限があるので、具体的に取り上げて実践できないことが問題である。

写真3に示す授業は、小学部5学年の小林教諭による「野菜サラダを衛生と安全に気をつけて作ろう」という授業である。

初めての調理実習に向けて、基本的な調理の設備や用具についておさえておくことを意図した授業を行っていた。ガスのつけ方や包丁の使い方を説明し、実際に児童に実習させた。そして、包丁の使い方チェックカードに記入させ、1時間の授業のまとめをするという流れであった。2時間続きの次の時間は、来週、野菜サラダの実習をする予定なので、班ごとに2種類の野菜を選び、どのように作るか、ドレッシングをどうするかを相談し、発表するという流れで授業が進められていた。

写真4は中学部1学年の大野教諭の家庭科の授業である。「ショートパンツの製作」で、また上を縫うことが本時の授業であった。1時間の授業で実習を指導するのは効率が悪く、生徒間には進度差が歴然と出ていた。このような事態は日本国内でも起きるが、解消する手立てをどうされているのだろうか。日本の学校での指導と同様の問題が日本人学校にも存在していた。

## 2 パリ日本人学校

### 2.1 学校の概要

パリ日本人学校<sup>6)</sup>は、昭和46年に全日制日本人学校設立準備委員会が発足し、昭和48年に開校された。平成2年に新校舎がサンカンタン駅から歩いて20分ほど

の閑静なところに設立された。フランス政府からは認定を受けていないが、文化団体としてのステイタスを維持している。

平成16年度の児童・生徒数は小学部194名、中学部71名で総計265名が学んでいる。専任教員は約20名ほどの学校である。日本人学校に共通していえることであるが、子どもの転出入が多く、出会いと別れの多い学校である。

また、校内には日本よりもっと日本らしいものがたくさん展示されている。昔遊びとして日本の文化に親しむことを推奨し、多数の日本文化を髣髴とさせる品々が展示され、休み時間に子どもたちが遊んでいる光景を目にした。これは、保護者の協力に負うところが大きく、成功裡のようであった。

### 2.2 家庭科の授業

パリ日本人学校では家庭科の授業を小学部5・6学年に週1時間、中学部1～3学年に週1時間ずつ担当している。

写真5は小学部6学年の梅田教諭による「衣服を気持ちよく」という題材の家庭科の授業である。衣服着用による汚れの種類や衣服の手入れ、衣服のサイクルについて学習していた。焼肉のたれ、しょうゆ、泥、クレヨンなどの汚れを試験布につけ、班毎に汚れを落とす実習を行っていた。「家庭科のススメ」という梅田教諭のオリジナルのワークシートを活用し授業を行っていた。

また、写真6は中学部2学年の古橋教諭による家庭科の授業である。「郷土料理を調べて作って食べよう」という題材で自分の出身地の郷土料理をインターネットで調べる授業である。

調べ学習により郷土について振り返り、自分の郷土を紹介し、家庭科の調理実習に関連させていくというねらいである。



写真3 小学部の家庭科の授業



写真4 中学部の家庭科の授業

日本全国から集まっている日本人学校の生徒を対象にしているからこそ可能な学習であり、日本人学校の特徴を取り上げた指導といえる。様々な出身地の生徒がいるので、多種多様な郷土料理が調べられていた。生徒たちがインターネットを使って、料理名、郷土名、材料、作り方、必要な道具、どんな時食べられているかを調べ、料理のPR、完成予想図などワークシートにまとめるといふ学習である。さらに、パリ日本人学校の調理室で調理できるものを、投票により上位6位までを選んで調理をしていくことにつなげていくという展開である。

家庭科担当の教諭からヒアリングをしたことを集約すると、パリ日本人学校の中学部では、被服の学習を取り上げないようである。また、中学部の3学年の生徒が小学部の1学年の児童と遊んであげる機会を設定し、これを保育の学習の一環として取り上げている。このことは、在外生活をしている子どもたちに共通して言えることであるが、同じアパートマンにすんでいる同年代の子どもとしか遊べないなどの制約があるため、学校が人間関係を形成する場となっている。そのためにも、中学部のお兄さんお姉さんが小学部の1学年の児童と遊ぶことによって人間関係を豊かにすることができる。さらに、保



写真5 洗濯の実習



写真6 中学部の家庭科の授業

育の学習にもリンクさせていくことができるということには有意義な学習といえる。また、パリ日本人学校は調理の熱源は電熱なので、やけどなどのおそれや火力の問題など指導において留意していることを聞き取ることができた。

### 3 調査結果

#### 3.1 海外生活の態様

今までに海外で生活した経験を尋ねたところ、今回の渡航生活が初めてであると回答した子どもが約55%、2ヶ国以上の滞在経験者は16%であり、大半は今住んでいる国での生活が初めてである。いつこの国へ来たかを尋ねたところ、小学部の低学年の時が12%、小学部中学年の時が約30%、小学部高学年の時が約35%、中学生になってからが約24%であった。滞在年数では、2年未満が約74%、4年未満約20%、6年未満が6%、なかには8年以上という長期間滞在している子どももいた。

イギリスやフランスで生活することを聞いた時の心理的動揺では、「できれば行きたくないと思った」という消極型は全体では5割、「早く行ってみたいと思った」という積極型は2割であった。また、図1に示すように、小学部の児童の方が渡航に際し拒否的な意識を抱いていた。中学部の生徒は約6割が「生活や友達のこと、言葉が不安であった」と回答していた。特に不安型や拒否型が多く、生活の適応に苦慮していることが推察できる。

#### 3.2 家庭の仕事への参画

手伝いの必要性をどう感じているかを尋ねたところ、表1に示すように、「考えたことがない」が小学部46.2%、中学部25.3%で、手伝いに対する意識の希薄化が顕著に示された。また、表2に示すように、約半数の児童・生徒は女の子らしくや男の子らしくなどと親から言われていないが、中学部の生徒に親の養育意識の特徴が示されていた。

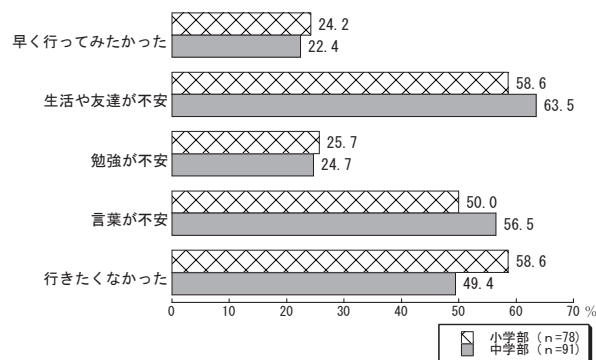


図1 渡航時の心情 (M.A.)

表1 手伝いに対する意識 (%)

	小学部	中学部
手伝いも勉強も大事	32.1	38.5
手伝いの方が大事	5.1	15.4
勉強の方が大事	16.7	20.9
考えたことはない	46.2	25.3

$\chi^2(3) = 12.3337, p < .05$

表2 ジェンダー観 (%)

	小学部	中学部
ジェンダー意識あり	14.1	26.4
ジェンダー意識なし	47.4	51.6
覚えていない	38.5	22.0

$\chi^2(2) = 8.41374, p < .01$

前述のように手伝いも勉強も大事であると、3～4割の児童・生徒が回答し、手伝いの重要性については知識としては理解している。しかし現実の生活の場での手伝いの遂行率は、次に示すように低い結果となった。

図2に家庭で手伝いをしているかどうか「いつもする」「時々する」「全くしない」の3件法で自己評価をさせた。小学部の児童は『食事の後かたづけ』を43.6%がよくしているが、『ボタン付け』を84.4%、『自分の衣服の洗濯』を75.3%が「全くしない」と回答している。つまり、子どもたちは衣生活に関することは殆ど手伝っていないといえる。一方中学部の生徒は『食事の後かたづけ』が56.7%、『自分の部屋の掃除』が56.0%、次いで『ゴミのしまつ』が47.3%がいつも実践していた。食事にかかわる仕事以外の各項目において児童・生徒間に1%水準で有意差が認められ、中学部の生徒の方が家庭の仕事への参加をしているといえる。手伝いの内容からみると、中学部の生徒の自己の生活空間を管理したいという発達段階の特徴がみられる。戸外へ外出することへの規制があるので『ゴミのしまつ』や『買物』の遂行率は低いが、ロンドンやパリ日本人学校の児童・生徒の家

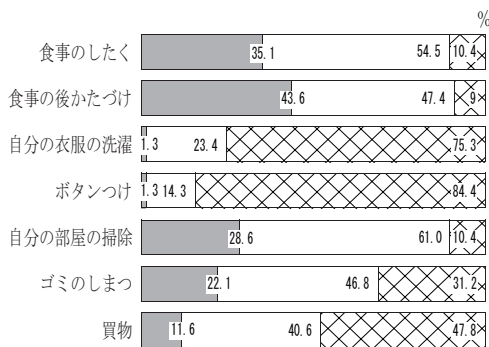


図2 手伝いの程度 (小学部) (n=78)

庭の仕事の実践率はマレーシアや台湾の子どもたちの実践率<sup>7)</sup>より高い傾向が認められた。この要因として、アジアでは家の中の仕事をお手伝いさんがするという慣習があり、多くの家庭で雇用している。しかし、今回の調査では児童・生徒の1割にも満たない家庭しか家庭内の仕事をする人を雇用していなかった。したがって、子どもたちにも家事参加の必要性が生じていることが指摘できる。

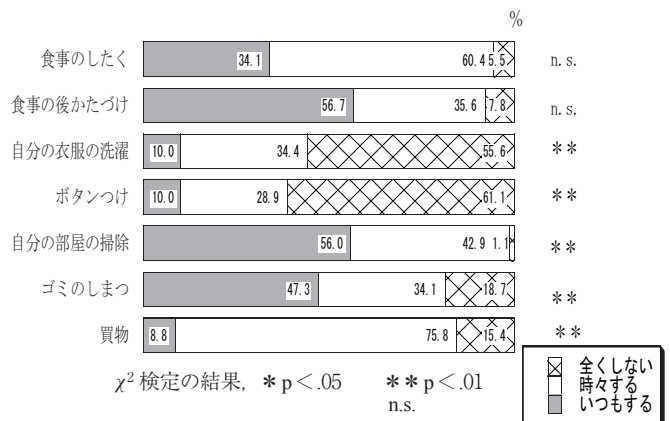
海外子女教育は、日本国内の教育をモデルにするのではなく、子どもの自己の確立をめざす教育へと転換していかなければならない。子ども一人一人が自分の生き方について自己決定できるようにすることであり、それは親自身にも求められていることでもある<sup>8)</sup>と言われている。このことは、子どもが海外で生活するうえで、かつ生活の自立という面でも、家庭の仕事の実践は欠くことができないものといえる。

### 3.3 海外生活への満足度

ロンドンやパリでの生活を「大変満足」から「大変不満足」の5件法で回答してもらった。「大変満足」と「やや満足」を合わせると、表3に示すように、全体では『住生活』、次いで『家族の連携』に対して6割以上の児童・生徒が満足感を示している。学校段階では有意差がないが、性別では『衣生活』において1%水準で有意差が認められ、男子が満足感を表明している。『家族の連携』の満足度は最も高く、中学部の生徒に限っては『衣生活』や『住生活』に対する満足度が高いことが判明した。しかし、一人で子どもが外出してはいけないという国の条例のため、買物への不満足感は強く表出されている。

### 3.4 家庭科学習に対する意識

図3は中学部の生徒の学習領域に対する興味の程度を示したものである。『食物』の内容に7割以上の男女



手伝いの程度 (中学部) (n=91)

表3 日常生活の満足度 (%)

		大変満足	やや満足	どちらとも	やや不満	大変不満
衣生活	小学部	14.3	24.7	42.9	18.2	0.0
	中学部	16.7	27.8	38.9	13.3	3.3
食生活	男子	20.4	25.8	44.1	9.7	0.0
	女子	9.5	27.0	36.5	23.0	4.1
住生活	小学部	23.4	23.4	20.8	27.3	5.2
	中学部	21.1	26.7	30.0	16.7	5.6
買物	男子	21.5	28.0	24.7	20.4	5.4
	女子	23.0	21.6	27.0	23.0	5.4
家族の連携	小学部	35.1	31.2	14.3	15.6	3.9
	中学部	35.6	35.6	15.6	10.0	3.3
近所つきあい	男子	34.4	35.5	14.0	11.8	4.3
	女子	36.5	31.1	16.2	13.5	2.7
買物	小学部	6.5	16.9	46.8	16.9	13.0
	中学部	12.2	15.6	36.7	24.4	11.1
家族の連携	男子	10.8	15.1	37.6	19.4	17.2
	女子	8.1	17.6	45.9	23.0	5.4
近所つきあい	小学部	35.1	33.8	29.9	0.0	1.3
	中学部	30.0	28.9	31.1	6.7	0.0
近所つきあい	男子	30.1	35.5	31.2	1.1	2.2
	女子	35.1	25.7	29.7	6.8	2.7
近所つきあい	小学部	15.6	19.5	37.7	9.1	18.2
	中学部	11.1	20.0	41.1	15.6	12.2
近所つきあい	男子	15.1	19.4	35.5	12.9	17.2
	女子	10.8	20.3	44.6	12.2	12.2

(小学部n = 78, 中学部n = 91 男子n=93, 女子n=74)

が興味を示していた。「とても興味がある・興味がある」と回答した女子生徒は『被服』に対して約63%, 『幼児の生活』に対して約53%であった。『被服』や『住居』や『幼児の生活』に関する学習に対する興味・関心の男女差は大きく、有意な差が認められた。

図4は複数回答により家庭科の学習に対して、どのように認識しているかを尋ねたものである。8割強の生徒が『調理実習が楽しい』と回答しているように、調理実習の楽しさを高く評価していることは当然といっても過言ではない。家庭科学習が『将来に役立つ』と女子の

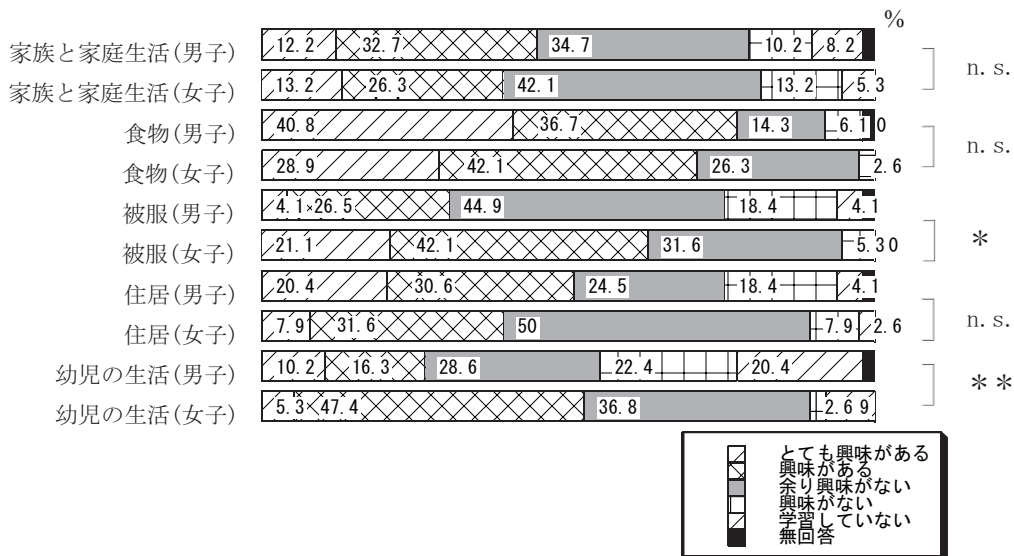


図3 家庭科の学習内容に対する興味 (中学部)

69.4%が回答しているのが特徴である。また、これまでのアジアをフィールドにした調査結果と比較すると、アジアの生徒より『授業が楽しい』『授業がやさしい』『生活に役立つ』『生活に関する学習がすき』『もっと勉強したい』『学習がよくわかる』などの項目を選択している生徒が多いことがわかった。したがって、家庭科の学習に対して好感を持っているといえる。しかし、『住んでいる地域の生活を学べる』は男子生徒17.0%、女子生徒2.8%と低率であることから、異文化の中で生活している機会を活用して指導がされていないことがわかる。今後、児童・生徒の在外生活経験を生かした、現地の生活を教材とした学習を取り上げ、指導の工夫を試行していくことが望まれる。このことが、家庭科がもつ教科の独自性を発揮できるところであると確信する。

### 3. 5 家庭科観

家庭科という教科をどのようにとらえているか複数回答させた結果が図5、図6である。小学部の児童は『日常生活に役立つ』『生活に関連の深い教科である』、『生活に必要な技術の学習をする教科である』と8割が回答

した。中学部の生徒は、全体的に回答率は低く、『男女ともに学習する必要がある』と8～9割、『生活に関連の深い教科である』と約8割が回答した。小学部の児童が『家庭科を女子が学習する教科である』ととらえているものが1割強いること、中学部の生徒の8～9割が『男女ともに学習する必要がある』と回答し男女ともに学ぶ教科としての意識が高いことなど、学校段階により意識の特徴が明らかになった。つまり、家庭科は生活に関することや技術を学習するので自己の生活に役立ち、男女ともに学習すべき教科であるととらえていた。

### 要約

本研究は、ロンドン及びパリ日本人学校における家庭科教育の現状を明らかにするために学校参観と質問紙調査の二方法により研究に取り組んだ。そして、児童・生徒の家庭生活観や家庭科観を明らかにすることを目的とした。

1. ロンドン日本人学校やパリ日本人学校の児童・生徒は渡航や異文化での生活に対し不安や拒否的な意識

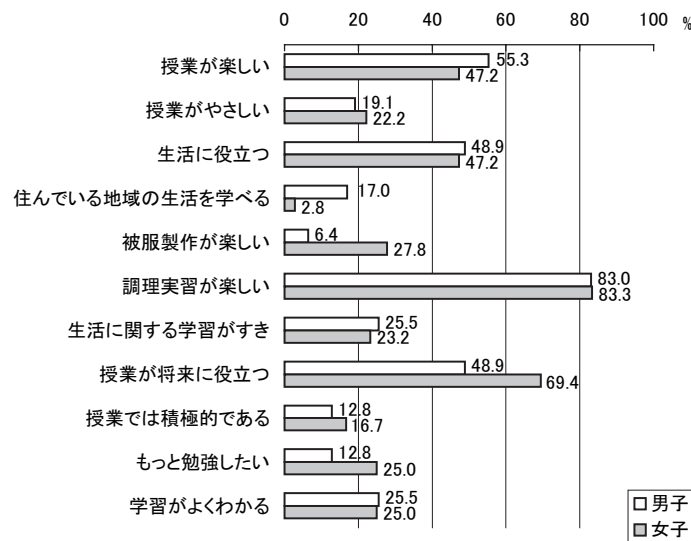


図4 家庭科の授業に対する意識 (中学部) (M.A.)

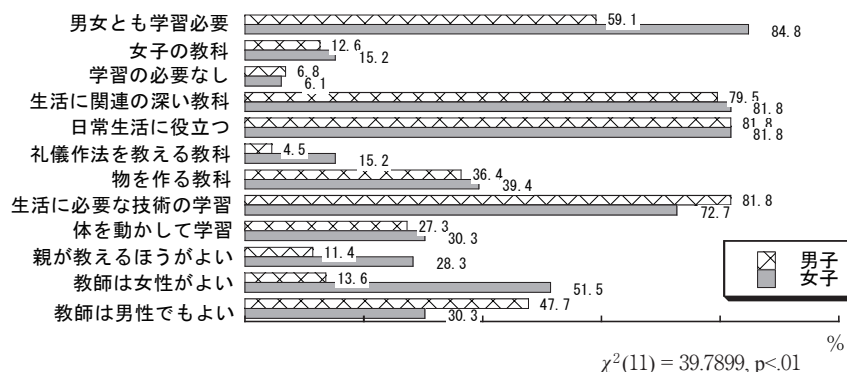


図5 家庭科に対する意見 (小学部) (M.A.)



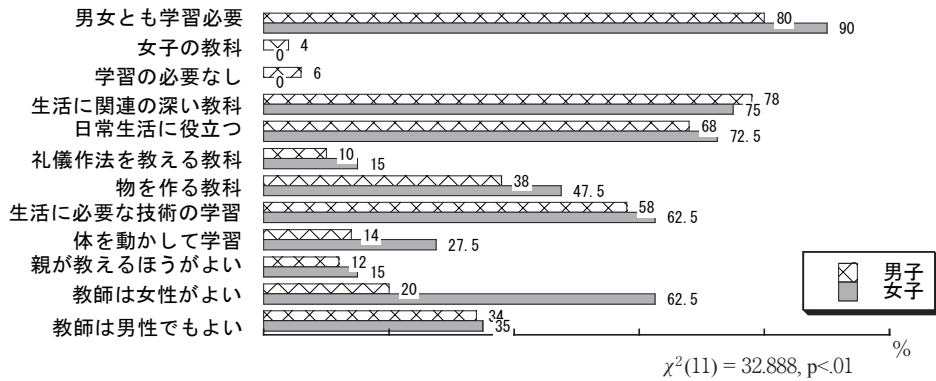


図6 家庭科に対する意見 (中学部) (M.A.)

を持っていた。

2. 食事の後片付けの遂行率は高いが、衣生活に関しては全体的に低率であった。『ゴミのしまつ』や『買物』を除いて、児童・生徒の家庭の仕事の実践率は高い傾向が認められた。この要因として、ヨーロッパでは家の中の仕事をお手伝いさんがするという慣習がなく、子どもたちにも家事参加の必要性が生じていることが指摘できる。
3. 『住生活』に対しては満足感が高かったが、異文化での生活をエンジョイしているとはいえない状況であった。一人で子どもが外出してはいけないという滞在国の条例のため、買い物への不満足感は強く表出されていた。
4. 『食物』の内容は男女とも関心が高く、女子は『被服』や『幼児の生活』に関する学習内容に興味を示し、学習に対する男女差がみられた。家庭科は生活に関することを学習するので、自己の生活に役立ち、男女ともに学習する教科であるにとらえていた。
5. 施設見学や授業観察から家庭科に関する施設・設備はほぼ充足していた。
6. 今後、異文化接触の機会をとらえて、現地の生活文化に触れる機会を多くし、生活の仕方や考え方を児童・生徒に柔軟にとらえさせる学習の展開を提言する。それには地域との交流を積極的に進めていくことが必要となってくる。

日本の教育改革の大きな柱の一つとして国際理解教育が打ち出されたが、世界の国々や民族との交流が深まる中で、この教育理念は重要性を増してくると思われる。さらに親に帯同し海外で生活し、学んで帰国してくる児童・生徒のために、在外教育施設の教育状況も周知しておく必要がある。また、今日の教育に対する要請をふまえて、指導していくことが喫緊である。

本報告は、日本家庭科教育学会第48回大会（東京）において口頭発表したものを修正・加筆した。

学校参観に便宜を図ってくださったロンドン日本人学校およびパリ日本人学校の教諭の皆様には感謝いたします。また、調査に協力して下さったロンドン日本人学校およびパリ日本人学校の児童・生徒の皆様には感謝いたします。

#### 付記

本研究は、平成16～18年度科学研究費補助金基盤研究(c)「児童・生徒の異文化体験と家庭科教育に関する実証的研究」(課題番号 16530565)によって行った研究の一部である。

#### 参考文献・引用文献

- 1) [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/clarinet/g2.html](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/g2.html)
- 2) [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/clarinet/g5.html](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/g5.html)
- 3) 平成16年度ロンドン日本人学校学校要覧 2004年
- 4) 佐藤郡衛：海外・帰国子女教育の再構築－異文化間教育学の視点から 玉川大学出版部 p92 1997年
- 5) 平成16年度ロンドン日本人学校学校要覧 p8 2004年
- 6) 平成16年度学校学校要覧 p7 日仏文化学院・パリ日本人学校 2004年
- 7) 池崎喜美恵：海外・帰国子女教育における家庭科指導方法の開発に関する研究 平成12年度～平成14年度 科学研究費補助金 基盤研究(C)(2) 研究成果報告書
- 8) 佐藤郡衛：国際理解教育 多文化共生社会の学校づくり 明石書店 p102 2001年

# The view of home life and home economics of the students in the Japanese School

— The case of the Japanese School in London and the Institut Cultural Franco-Japonais —

Kimie IKEZAKI\*

*Department of Home Economics Education*

## Abstract

This research was aimed at clarifying the study experience and educational view of home economics of the students in the Japanese School in London and the Institut Cultural Franco-Japonais. Observations of home economics classes, facilities and equipment were made.

A questionnaire was carried out from October to November 2004. The replies of 169 students from upper classes of elementary schools and junior high schools were used for the analysis.

Consequently, the following knowledge was acquired.

1. Students felt comparatively uneasy and in denial in regards to life abroad and to the foreign culture.
2. Students often rearranged the meal.

In general, the students who resided in Europe carried out housekeeping well.

3. Children were satisfied with their home. However, children didn't enjoy life in the foreign culture so much.

Since there were regulations which restricted children from going out alone, they could not buy freely. So they had dissatisfaction in shopping

4. Boys and girls had high concern in the contents of study about food.

The girls showed interest in the contents of study about clothing and childcare, and the interest in the study contents was different according to gender.

5. When I observed the home economics lesson and inspected the institution, these schools were nearly fully equipped with facilities and equipment for home economics.

I propose providing more opportunity for the students to come in contact with the foreign culture, and develop study in which they can flexibly embrace their own lifestyle and philosophy.

**Key words:** home economics, Japanese school, Europe, students, home life

---

\* Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukui-kita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)